現場の求める保育士の音楽的資質について

— 滋賀県内の保育所へのアンケート調査から —

○近藤久美
(一宮女子短期大学)

吉弘淳一
(滋賀文化短期大学)

I はじめに

保育者養成校における音楽の授業内容を考える時、次のような疑問を感じることもある。学生たちは、大学在学中に学んだ学習の成果を、卒業後、現場で活かすことができるのだろうか。一方、園側としては、即戦力として働ける学生を望んでいるに違いない。

現場の要求にそのまま応えるという訳でなく、生の声を聞くことも参考になると考え、現場へのアンケート調査を行うことにした。

本研究は、現場が、新しく就職してくる保育士たちに音楽を含めどんな基礎的能力を求めているのか、また、「ピアノ」「歌」等については具体的にどのような技術を求めているのかを調査し、今後の音楽授業の内容や進め方の参考に資するよう考察を加えるものである。

また、最近障害児に対する音楽療法に関心が高まっている。実際に音楽療法が、現場でどのように受けとめられているか、その意識調査も合わせて実施した。

II 調査方法

1. 期間 平成12年10月～12月
2. 対象 滋賀県下全保育所 233(♂149 ♀84)
3. 回収 130(♂85 ♀45) 回収率55%
4. 方法 質問紙郵送によるアンケート調査

III 調査結果の概要と考察

1. 障害を持つ子どもの入所率

アンケート調査の回収 130カ所中、108カ所において障害を持つ子どもが入所していることが分かった。

滋賀県全体における障害を持つ子どもの入所率については、平成9年度(♯606)、平成10年度(♯663)、平成11年度(♯711)、平成12年度(♯798)である。年々緩やかに増加傾向を示している。障害を持つ子どもが増えているということであろうか。

(※「平成12年滋賀県児童家庭局資料報告」)

2. 保育士に求められる基礎的能力

ピアノ演奏力(27%)、運動能力(22%)、文章作成力(20%)、歌唱力(14%)、美術的能力(16%)、

パソコン・ワープロ技能(20%)という結果が出た。

ピアノ演奏力が1位ということは、音楽活動に力を入れている所が多いということであろうか。また、危険な状態に陥った場合に求められる機敏性や判断力、日誌・指導案・保護者へのお便りなどを書く能力も求められていることが分かった。

3. 保育士に求められる音楽的要素「歌」

楽しそうに歌える(41%)、音程正しく歌える(20%)、子どもの歌をたくさん知っている(16%)、大きな声で歌える(5%)、情感豊かに歌える(14%)、歌唱指導の方法を知っている(3%)という結果が出た。

保育士自身が歌を楽しまなければ、子どもに歌う楽しさは伝わらないであろう。正しい音程で歌うということも歌を正確に教えるという意味において大切なことと思われる。

4. 保育士に求められる音楽的要素「ピアノ」

子どもの顔を見ながら弾ける(39%)、最後まで止まらず弾ける(18%)、弾き歌いができる(15%)、曲の雰囲気を出して弾ける(13%)、楽譜どおりに正しく弾ける(13%)、コードネームを見て伴奏ができる(2%)という結果が出た。

子どもの顔を見ながら弾くということは、難しい技術である。最後まで止まらずに弾くことも、簡単そうに思えるが、卒業したての学生にとっては難しいことである。これだけの技術を修得させるためには、かなりの練習量と経験が必要になるだろう。

5. 保育士に求められる音楽的要素「その他」

手あそび・指あそびをたくさん知っている(71%)、わらべうた・伝承あそびをたくさん知っている(16%)、リトミックの指導ができる(2%)、鼓笛の指導ができる(2%)、いろいろな楽器を演奏できる(7%)、障害児に対する音楽療法の知識がある(1%)という結果が出た。

手あそび・指あそびは子どもの脳の発達に欠かせない大事な遊びである。この結果は当然のことであろう。

6. 次の基礎的能力を有する在園保育士数（人）

(1)園で使う歌の伴奏は大体弾ける	1,282
(2)子どもの身体表現に合わせて伴奏できる	996
(3)よく通る声で歌が歌える	993
(4)初見・移調ができる	642
(5)リトミックの指導ができる	561
(6)箏笛の指導ができる	531
(7)障害児に対する音楽療法の知識がある	105

7. 音楽療法についての認知度

よく知っている（6%）、少し知っている（35%）、あまり知らない（36%）、知らない（21%）と、「知っている」とした全体の数値は41%であるのに対し、「知らない」とした全体の数値は57%であった。音楽療法についての認知度は、まだまだ低いようである。

8. 障害児音楽療法についての興味

大変興味がある（23%）、少し興味がある（65%）、特に興味はない（8%）、興味はない（2%）と、「興味がある」とした全体の数値は88%であるのに対し、「興味はない」とした全体の数値は、わずか10%であった。障害を持つ子どもが入所する全ての保育所においては「興味がある」という回答が出た。障害を持つ子どもたちの成長、発達を促すために何とかしたいという保育士の意欲がこの数値から感じとれる。

また、音楽療法については知らないが興味があると答えた割合は、回答者74人中の60人（80%）であった。音楽療法の必要性が示唆されていると推察できる。

9. 音楽が子どもたちに与える影響

大変大きいと思う（41%）、大きいと思う（56%）、特に思わない（0%）、思わない（0%）、無回答（3%）という結果が出た。無回答を除いた全ての保育所において「大きい」という回答を得たことになる。どの園においても、音楽は重要視されているようである。

次に「音楽が子どもたちに与える影響は大きい」と答えた理由については、「豊かな感性が育つ」「情感が豊かになる」「情緒が安定する」「情操教育にいい」「協調性が育つ」「自分を表現する手段であり、豊かな表現力が育つ」といった音楽を通して子どもの人間性は養われるというものが圧倒的に多かった。

また、「子どもたちは歌が大好きなので、歌によって子どもたちの心の安定がはかれる」「音楽によって子どもたちと心を通い合わせることができる」「心身

の発達を助け、しなやかな身体作りができる」「音楽指導を通して、子どもの達成感、仲間意識を養うことができる」などの回答も多かった。興味深かったのは、「音楽には人間の感性をゆさぶるものがある」「音楽を通して得るものは大きい」「子どもにとってきれいな音楽に接することは必要」といった音楽絶対論のような回答もあれば「音楽は子どもの生活の一部でいい」「園生活の中で必要に応じて音楽を取り入れているだけ」という消極的な回答もみられたことである。もちろん、このような消極的な意見はごくわずかであり、回答して頂いたほとんどの園において、「音楽は子どもの生活に欠かせない」という一致した意見が得られた。

その他、「難聴の子どもの養育に効果がある」「音楽療法を受けている障害児がいるため」「音楽が障害を持つ子どもに与える影響の大きさを経験した」という、音楽が保育と別の役割を果たしているといった回答も得られた。

IVまとめ

今回の調査から大体次のようなことが推測できた。

まず、現場が保育士に求める最も重要な基礎能力はピアノ演奏力で、子どもの顔を見ながら弾ける技術が必要である。他の音楽的要素については、子どもと一緒に楽しく歌が歌え、手あそび・指あそびをたくさん知ってほしい。一方、在園する保育士のほとんどは園で使う歌の伴奏が大体弾け、身体表現に合わせて伴奏したり、よく通る声で歌を歌う技術を持っている。障害児に対する音楽療法については、興味はあるものの、その知識に乏しい。ほとんどの保育所が何らかの音楽活動を行い、子どもの生活に音楽は必要と考えている。

現場の要求にそのまま応えるのが養成校側の役目とは思っていないが、今回のアンケート結果は、今後の授業展開に十分参考になるものと思っている。